



921
ホ 2

辯玉散論
全

辨玉霰論

三井高蔭



○何の教の下にやもしとおくも

或人の論ふいふくき

辨云日本紀の外にふれや一人とあるやいふるをやし。かし
こや一をよめたのやし。まてやいよにふふ辨あつていれ。後ひ
のや。かひい。れ又ふれ。一人とある。い。万葉にいれ。ま。ふれや
の人とある。い。何の書か。もうい。てい。る。を。い。ふ。る。粗。忽。と。や
ま。づ。一。條。小。う。や。の。を。さ。ら。ふ。と。ち。て。昔。本。紀。の。昔。の。後。を
く。し。う。む。と。せ。う。と。い。と。と。あ。れ

○ま



今さらさらいひはきくわとよまへし世つらしむ物産をよ
しふまけ備産の老にこうしこ備産の洞ふ備産の老
るいふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
し人の名とよしつら。

論云

辨云官位ある人おひ氏のこよていまたつらしむれがる書
外子しとちるいひ今の人い何れ何れ書といふ称あれ
これとこしむふ何れあしむは称と俗とあひひて備
こは称あるあはういこの物い何れあしむも多しんて
即これとあしむもあしむあり近しく世人のいふよしつら

鑑倉の権お節を海流す所或は振京平三朝比奈こいふあとの
れあてもあしむし世しこれいあ書おはこれいしむいしむ
た物産あもあしむしんて原氏物産あもあしむと云し一い
しあありんく昔い昔ありむあしむあしむでいさくあしむ
てまはあしむしつらあしむい決してあしむしあしむと今世分
人どらの中あてあしむのあしむしつらあしむしつらあしむ
候ああしむあしむとや又あしむ人あてし世い世いあしむ
といふいあしむ粗忽ぞやん物産い世天下の人世こしむ
あありて今い歴のあしむとあしむ姓い候あしむあしむ
あしむといふ百人あ九十九人あて世いあしむあしむと古学者

小の書しるはるる所あるはなり但し其の書しるはるる所
られざるは其の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の
小の世の信ちしる所と云ふ事なり其の書しる所の推察と云ふ事なり

又の或人の論

○弁論の詞

辯論論小本指のぬし其の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の
おしる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の
て表裏せしむる所なり其の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の

其の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の
其の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の
其の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の
其の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の
其の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の
其の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の
其の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の
其の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の

辯論者指の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の推察と云ふ事なり其の書しる所の

文の口づきのいとよ〜似るに思ふおある漏れもと文の
いと控りしふより後ある漏れも人の多く並〜
ゆるまやあ〜むい〜つめよりあれる〜と申すも
い〜あ〜む

○又世論者文章の多を功者ら〜くをると世論の文い
ゆるふ〜る様々心持の〜めふむ〜と〜と〜
つ〜て海のふ〜れ〜や〜たの〜

終の條 け漏れが益海のと云ふ
語らより物を控〜削る〜〜〜
と〜とある〜
右の〜の文と〜
右の〜の文と〜

う〜ふ〜む〜と〜と〜
るふ又文を書ふと〜と〜
ふ合せ〜と〜と〜
右の文と今の文と
ゆる〜と〜と〜
あ〜と〜と〜
〜と〜と〜
い〜と〜と〜

といひくしむとありし「ハナハナ」の^{ハナハナ}そらちらしんてし
るおの^{ハナハナ}とまにまもらひぬあのをさちうめんぬもふきぬ
又とちめのやもし上のいりてとてふさはち洞十七行 業
あてこそうづううけしてひいけ語らみしづし
刺まへし「ハナハナ」の^{ハナハナ}もぬく又「ハナハナ」と
いふもまゝて捨ふし「ハナハナ」の^{ハナハナ}もぬく又「ハナハナ」と
さしめまゝもまゝし「ハナハナ」の^{ハナハナ}もぬく又「ハナハナ」と
又右の洞のしよふ既ふ「ハナハナ」の^{ハナハナ}ときとあれびこしち
それとまてそふあれバ又ときまふあしけ又「ハナハナ」と
ち「ハナハナ」は「ハナハナ」の^{ハナハナ}ひさしとま「ハナハナ」の^{ハナハナ}は「ハナハナ」

きのしよとちまれ「ハナハナ」の^{ハナハナ}しよとま「ハナハナ」の^{ハナハナ}つし
やうといふ心は溢れるふ「ハナハナ」又その古今のき「ハナハナ」又その
ちよまらし「ハナハナ」の^{ハナハナ}しよとま「ハナハナ」の^{ハナハナ}つし
さてこの決り言を下よ入うて よく洞とえいしち
後との海嶽とよふまま「ハナハナ」の^{ハナハナ}つし
い洞とえいしち「ハナハナ」の^{ハナハナ}つし
ありけくあるふふ海嶽の^{ハナハナ}つし
ありまゝくあるふふの^{ハナハナ}つし 此海嶽の^{ハナハナ}つし
さあていあれ「ハナハナ」の^{ハナハナ}つし 未文長たれ「ハナハナ」の^{ハナハナ}つし
ちまみく「ハナハナ」の^{ハナハナ}つし けまも此の^{ハナハナ}つし 右の^{ハナハナ}つし

考へ知るべしなす抄きするの身さへされど全篇これなりと
ふいよく書とりとり今世法をふ文よく書んくも大方と
え子け位のるえこれなりとも書ゆる人の法山ふいふし
とぞえれりる

○とが同じ学の友なる福掛大平が此論を思ふとさく此論
若吾翁のふ文とすむぐふとありいそありうれどもうら
ら書るけ文とえふふ今のふいふの人の文とつちがひら
近世のまろき癖もふく又古学者の癖もさくふまらま
さしく良薬一粒の玉霰丸のよくまらりる功験いち
るくえくくりであ

白菅人 颯満

写

